

心をよつめる

第その二十九

北九州市内・近郊の寺院の僧侶にお言葉をいただくコーナーです。老後を心豊かに生きるためのヒントとなりますように・・・。



真照寺 住職
喜多村 真嗣 さん



浄土真宗本願寺派
光雲山 真照寺
直方市下新入 1672-1
0949-22-4565

時間の重み

いまではご当地球団のソフトバンク・ホークスを応援していますが、私が小学生の頃には、本拠地を川崎球場から平和台球場へ移転する計画のあったロッテ・オリオンズを応援していました。

自身が西鉄である西武ライオンズと、西鉄の大エース「鉄腕」稲尾監督率いるロッテ・オリオンズが、平和台球場で対決するとき、父に連れられて観戦しました。

今のドーム球場とは違って、がらの観客席はおじさんたちばかりで、ビール片手に野次をとばしていました。試合終盤には、入場料別の観客席の仕切りが解放され、私はバックネット裏まで連れて行ってもらいました。プロの剛速球に驚嘆し、ネット越しでありながらファウ

ルチップに身を屈めました。当時パ・リーグはテレビ中継はめったにありませんでしたが、関係各位のご尽力があつてのこととはいえ、今では一層プレーの水準も高くなり、ずいぶんと華やかになりました。

野球を知らない友人から尋ねられたことがあります。「十回に二、三回ぐらいしか打てないのに何がすごいのか」。私は「そういうものだ」と答えてしまいましたが、後に中学校の数学の先生から教わりました。

「三割バッターと二割バッターの違いは、十打数のうち一本多くヒットを打てるかどうかというよりも、三割バッターは二割バッターの五割増してヒットを打っていることに意味がある」。

同じ数字、データを見ても、視点で意味が変わってしまうことを教わりました。様々な分野で、そういっ

た統計や心理学が活用されていることは、しばらく後になって知りました。どの視点からそのデータの意味をとらえるか。場合によってはそれだけで全く異なる世界が開かれます。

しばしば、「一年経つのが早くなった」という言葉が聞かれます。「一年」という時間の定義から考えると非科学的な表現ですが、「人生の中の割合」と考えると意味が変わります。

同じ「一年」という時間であつても、一歳であれば人生のすべて。二歳になれば人生の半分。八十歳になれば八十分の一。年齢を重ねていくと、人生における「一年」の割合はどんどん小さくなってゆきます。「一年経つのが早くなった」と感じられるのは、当然ともいえます。

あと、どれぐらいの人生が残されているかはわかりません。しかし、

諸行無常の理のとおり、人生の終わりには確実にやってきます。残された人生は、過ぎた時間の分だけ少なくなりません。にもかかわらず、今まで以上に早く過ぎてゆきます。だからこそ一層、幼い頃、若い頃よりも「いま」という時間の重みは増すこととなります。

人生の先輩方におかれましては、大切な「いま」の歩み様を、若者達、子ども達へ見せつけていただきたいと願っております。

合掌